ハチ目ケアシハナバチ科

シロアシクサレダマバチ

青森県：C
環境庁：該当なし

雄、円内はクサレダマを訪花中の雌　　山田雅輝撮影

体長8.5～11㎜で、北海道と本州に分布し、本州では本県だけから得られ、岩木山麓の鯵ヶ沢町・弘前市・岩木町、夏泊半島などに生息しています。成虫は7月下旬から8月にかけて活動し、サクラソウ科のクサレダマとオカトラノオを訪れるが、中でもクサレダマが花粉源として利用されます。巣は粘土質の明るい地面に坑道を掘って造ります。営巣条件を伴った場所にある特定の花に依存しているため生息地も限定されます。

山　田

ハチ目ハキリバチ科

クズハキリバチ

青森県：D
環境庁：該当なし

クズを訪花中の雌　　山田雅輝撮影

体長19～20㎜の南方系のハチで、本県は分布の北限に当たります。平地から低山地にかけて生息し、黒石市、岩木町、平賀町で確認されています。成虫は8月頃に現れ、クズの花を好んで訪れます。黒石市で発見した巣はリンゴ樹の空洞部に貯まった土の中にクズの葉片を重ねて造っていました。クズは広く分布しているのにこのハチが少ないのは、営巣できる場所があまりないためではないかと考えられます。

山　田

ハチ目コシブトハナバチ科

オカモトキマダラハナバチ

青森県：D
環境庁：該当なし

寄主の巣穴から出る雌　　山田雅輝撮影

体長8～12㎜で、北海道と北東北に分布する北方系の種です。県内では岩木山麓と弘前市内だけで認められています。成虫は7～8月頃に活動し、営巣中のヒロズキバナヒメハナバチの巣穴に入り込んで、その卵を殺し、自分の卵を産み付けます。このような行為を労働寄生と言っています。寄主のハチはツルフジバカマの花が生育する自然草地に生息し、粘土質で草の少ない裸地などに巣を造ります。

山　田

ハチ目コシブトハナバチ科

ハイイロヒゲナガハナバチ

青森県：D
環境庁：該当なし

蜜を吸う雄　　山田雅輝撮影

体長15㎜位で、雄は体長に匹敵する長い触角を持っています。近似種のシロスジヒゲナガハナバチと同時にいることがあるので、混同しないように注意が必要です。北海道と本州から知られていて、県内では深浦町だけで得られています。年1回発生で、成虫は6～7月に活動し、グミ、クサフジなどの花を訪れ、蜜（みつ）や花粉を採集します。地面に穴を掘って巣を造ると考えられますが、詳しい生態は不明です。

山　田

ハチ目コシブトハナバチ科

ルリモンハナバチ

青森県：A
環境庁：該当なし

雌　　山田雅輝所蔵

体長13～14㎜ある南方系のハチで、本県が分布上の北限に当たります。瑠璃色の斑紋をもつ花バチは本県ではほかにいないのですぐ判ります。1934年の八戸産、1965年の平賀町産の2例しか記録がなく、いずれも35年以上前の古いものです。成虫はアザミなどの花へ蜜を吸いに訪れ、8～10月に得られています。地中営巣性であるスジボソコシブトハナバチ又はシロスジコシブトハナバチに労働寄生すると言われています。

山　田

ハエ目カ科

トワダオオカ

青森県：C
環境庁：該当なし

大八木昭撮影

体長10㎜内外。体が青藍色の美しい種類で日本最大のカです。本種は、十和田湖で採集された雄の標本で新種として発表されました。産地が限られる希少種です。自然度の高い林に生息しています。本種は、北海道、本州、四国、九州に生息する日本固有種で、本県では八甲田山、梵珠山、川内町、白神山地などから記録があります。吸血性ではなく、幼虫はブナなどの樹洞の水たまりに生息し他のカの幼虫を捕食します。

山　内

チョウ目メイガ科

モリオカツトガ

青森県：D
環境庁：該当なし

岩手県産　　土井信夫氏所蔵

開張20㎜内外。前ばねは銀白色、外縁には橙黄色の紋(もん)があるたいへん美しい種です。本種は北海道、本州（東北、関東）に分布する日本固有種です。国内での生息地はたいへん少なく、東北地方では本県、岩手県、秋田県から知られています。盛岡市では多産しますが、本県からは1993年に東通村大利の湿地から記録されているだけの種類です。

山　内

チョウ目セセリチョウ科

ホシチャバネセセリ

青森県：A
環境庁：絶滅危惧Ⅱ類

室谷洋司所蔵

はねの長さは11㎜位で県内産チョウ類の中で最も小型です。黒の地色に小さな白斑(はん)列があるのが特徴です。黒いハエでも飛んでいるように、目まぐるしく飛翔するので見失いやすく止まるまで確認が難しい。本県が北限の希少種で、県東南地方の特産種として知られていましたが、ここ数年見られなくなりました。

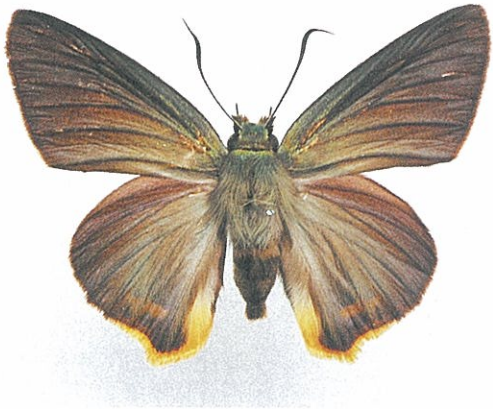
道路や河川の改修と耕地整理が進み、周辺の食草のオオアブラススキが減少したことが原因と考えられています。

三　浦

チョウ目セセリチョウ科

アオバセセリ

青森県：D
環境庁：該当なし



三浦博所蔵

はねの長さは25㎜位でセセリチョウ科の最大種です。表は鈍い青緑色で、後ばねの後方は赤橙色に縁どられています。本県が北限の希少種で、県内では主に県南地方や西海岸地方に生息していましたが、最近では下北地方でも見つかっています。幼虫はアワブキという植物を食べて育ち、この葉を筒状にして巣を作る独特の習性があります。アワブキも県内が北限の少ない木で、ともに大事にしていく必要があります。

三　浦

チョウ目セセリチョウ科

ギンイチモンジセセリ

青森県：C
環境庁：準絶滅危惧

白山一訓撮影

裏面の黄色地に銀色の一文字が名前の由来となっています。草丈の低い里山の草地を生息地としています。1960年代までは、牛馬の飼料用に採草が行われたので、適度な草丈の草原が保たれていて、草地上をたくさん飛んでいました。牛馬が飼われなくなってから、草地は畑・果樹園に転用されて生息地は年々狭められてきました。現在は里山の丘陵地にいくらか生息域が残っていますが、草地を守ってやらないといなくなってしまいます。

三　浦

チョウ目セセリチョウ科

チャマダラセセリ

青森県：A
環境庁：絶滅危惧Ⅰ類

三浦博撮影

暗色の地色に白点を星のようにちりばめた小型のセセリチョウの仲間です。日当たりの良い山地草原や山間の草地を生息地としています。これらの草地は牛馬の飼料の採草地として、定期的な草刈りで良好な環境が保たれていました。牛馬を必要としなくなった頃から、草地は放置されるか開拓や開発によって、畑・果樹園・造林地に変わり、生息に適さなくなりました。

最近ではほとんど見かけなくなり絶滅が心配されています。

三　浦

チョウ目アゲハチョウ科

ヒメギフチョウ

青森県：C
環境庁：準絶滅危惧

三浦博撮影

はねの長さは28㎜位で黄色と黒のだんだら模様のアゲハチョウの仲間です。早春のカタクリ、スミレなどで蜜（みつ）を吸う様子は春の女神と愛称されています。津軽、下北両半島を除く県内各地に生息していますが、いずれの地域も局所的で生息数がいちじるしく減少しています。生息するためには広い雑木林と食草のウスバサイシンと蜜（みつ）が吸える植物の三つの要素が必要です。雑木林が伐採されると生息できる環境がなくなってしまうのです。

三　浦

チョウ目シロチョウ科

ヤマキチョウ

青森県：A
環境庁：準絶滅危惧

室谷洋司所蔵

雄のはねは鮮やかな濃黄色、雌は淡い黄白色で近い仲間のスジボソヤマキチョウによく似ていますが、前ばねの外縁が強く赤桃色を帯びることや赤橙色の小斑（はん）が大きいことから区別されます。

本県が北限の希少種で40年位前に県南地方に記録されましたが、その後、見つかっていません。雑木林や林縁に生育するクロツバラという植物を食べて育つのですが、クロツバラが道路工事や開拓によって減ったためと考えられています。

三　浦

チョウ目シロチョウ科

ヒメシロチョウ

青森県：C
環境庁：絶滅危惧Ⅱ類

三浦博撮影

はねの長さは23㎜位のシロチョウ科の小型種ではねは細長く、表裏とも白色です。県内では平地から低山にかけての沼や河川の土手・畑・山間・林縁の草地などに普通に見られていました。人里に近いため、道路・河川工事や宅地開発で幼虫期に食べるクサフジや広い草地が減り、最近ではあまり見かけなくなりました。

土手や公園にクサフジを植えたりして守っていかないと、やがていなくなってしまいます。

三　浦

チョウ目シジミチョウ科

カバイロシジミ

青森県：B
環境庁：該当なし

三浦博撮影

はねの長さは18㎜位のシジミチョウの仲間です。雄の表面は青藍色に輝いていますが、雌では暗褐色で基部だけに青藍色の色彩があります。北海道と本県にだけ生息する南限の貴重なチョウです。津軽半島北端と下北半島西側の海に面した急峻な崖地や急斜面に生息しています。ここに自生するヒロハノクサフジ群落に依存しているからです。

近年、道路整備や海岸保全工事などで崖が削られ生息域が少なくなっています。

三　浦

チョウ目シジミチョウ科

ウラナミアカシジミ

青森県：C
環境庁：該当なし

三浦博撮影

樹林に生息するミドリシジミの仲間の橙色種です。裏面はゼブラ状に多数の黒斑があるのが特徴です。1970年代までは里山のコナラを主とした各地の雑木林にたくさん生息していました。コナラ林は薪炭材として利用され、人手によってほどよく管理されていたので生息にはとても良い環境だったのです。燃料が石油になって薪・炭は必要なくなり、林は切られて畑や宅地に変わってしまいました。現在は残った林に少しだけいます。

三　浦

チョウ目シジミチョウ科

オオゴマシジミ

青森県：D
環境庁：準絶滅危惧

三浦博撮影

八甲田山や白神山地など、深山の渓谷地に生息しています。このチョウは植物食から肉食に転ずる特殊な生態を持っています。幼虫期の半ばまで食草のクロバナヒキオコシを食べて育ち、その後、ヤマアシナガアリに運ばれアリの巣穴に入ってアリの幼虫を食べて育ちます。アリは幼虫の蜜腺（みつせん）から出る甘い汁をなめ、子が食べられるのを黙認するのです。不思議な共生を維持するためには人手の加わらない原生的な環境が必要なのです。

三　浦

チョウ目シジミチョウ科

ゴマシジミ

青森県：ＬＰ（竜飛崎）
環境庁：絶滅危惧Ⅰ類

三浦博撮影

裏面の白地にゴマ粒のような黒い斑点（はんてん）がゴマシジミの名前の由来です。津軽半島竜飛の個体は独特の斑紋（はんもん）をして分類学上とても貴重です。

このチョウはとても変わった一生を送ります。幼虫期の半ばまで餌となる植物を食べて育ちますが、その後シワクシケアリの巣穴に入り、アリに蜜腺（みつせん）から出る甘い汁を与える一方、アリの子供を食べて成長するのです。この共生関係を維持できるような草原や湿地が無くなりつつあるのです。

三　浦

チョウ目シジミチョウ科

クロシジミ

青森県：A
環境庁：絶滅危惧Ⅰ類

室谷洋司所蔵

はねの長さは20㎜位で雄の表面は光沢のある青紫色をしています。本県が北限の希少種で、1960年代に県南地方で散在的に記録されていましたが、近年はまったく観察などの報告がありません。このチョウの一生はとても変わっています。幼虫期の始めはアブラムシやキジラミの分泌物を吸って育ち、その後クロオオアリの巣中に入って、アリから口移しでえさをもらって育ちます。他の虫達と共生できる環境がないと生きてゆけないのです。

三　浦

チョウ目シジミチョウ科

ヒメシジミ

青森県：C
環境庁：準絶滅危惧

左：雌、右：雄　　三浦博撮影

はねの長さは14㎜位で、小さなシジミチョウの仲間です。雄の表面は青色に輝いていますが、雌は黒褐色で雌雄の色彩が異なります。道路沿いのヨモギやシロツメクサが生い茂る草地、荒地が生息地となっています。どこにでもありそうな環境ですが、なぜか生息地は特定されています。近年、道路整備や耕地整理などで生息していた場所が消滅することが多く、発生地を守ってあげないとやがていなくなってしまうかもしれません。

三　浦